

# 信仰の足跡

久方き歩く

キリスト教諸派の一つ「ロシア正教会」（日本ハリストス正教会）が千葉県下で布教を始めたのは1870年代後半、宣教師ニコライによるとされます。

1893（明治26）年、県下16の布教拠点に「福岡（当時の八日市場の町名）」と「須賀（蕪里）」が上げられ、

須賀正教会は1890（同23）年仮会堂が建てられています。

ニコライは全国での布教の様子を日記に残し、1892（同25）年の「下総巡回日記」には10月9、10日に蕪里を訪れたことが詳しく書かれています。



墓石に刻まれた十字架（豊栄地区久方・延命寺境内）

当時、蕪里では伝教司フィリップ鵜沢が「神学舎」の看板を掲げた学校を開いていて、ニコライの来訪を知ったソクラト平山が久方（豊栄村）から蕪里に向いて来たとあります。

市域には先の福岡、蕪里のほか久方と平木にも1898（同31）年にかけて教会が設立され、豊栄正教会には27人の信徒がいました。この教会の創始者は神田駿河台（東京都）の伝道学校で学んだ金杉泰助で、自宅に正教会を設立し、1897（同30）年、聖画「昇天図」（市指定文化財）が贈られました。

1899（同32）年に須賀正教会の聖堂が完成し、ニコライ大主教から山下りんの描いた10面の聖画（県指定有形文化財）が贈られ、現在も祭壇を飾っています。この聖画について「まだ鉄道が横芝までしか開通していなかったの」との記載が見られるものもありますが、これは誤りで当時の総武鉄道（現在のJR総武本線）は明治30年6月に銚子駅まで開通していました。横芝駅から蕪里まで聖画が運ばれたのは、距離が理由のようです。

明治中ごろ、市域にあったとされる4教会のうち、現存するのは須賀ハリストス正教会だけで、八日市場、平木の教会はまったく知ることができません。蕪里と豊栄正教会のあった久方の墓地に残された墓石に刻まれた「洗礼名」のみが信仰の足跡を伝えています。

（市文化財審議会委員・依知川雅一）

図書館課広報広聴班 ☎73・0080